
人形の心

星野 雫(Elwing)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形の心

【Nコード】

N75350

【作者名】

星野 雫 (E l w i n g)

【あらすじ】

五枚会の企画に沿って作ったお話を、連載形式で掲載したものです。五枚、という事だったので、それは、一作品で空白を含まずに約二千文字以内、という事としています。そして、それぞれのテーマ、禁則事項に沿っての創作になります。

最初は「五枚の飛沫だち」というタイトルにしましたが、五枚会も終わったため、より内容に近いと思うタイトルに付け替えました。

五枚会は終わりましたが、こんな作品でも、読んで、何かを感じていただければうれしいです。そして、何かご意見などありましたら、感想などをよろしくお願いします。

人形の恋（前書き）

テーマ …人形

禁則事項…主人公の「」による台詞は禁止

これは、人形？ 混沌の中から、ある形を得て、そして…。

人形の恋

最初に私、という存在を意識したのは何時だっただろう？

以前はこんな概念はなかったと思う。

それがどうしてだろう？ 今、『私』という存在がはっきりと感じられる。

いつ？ どこで？ どうして？ どうやって私は私になったんだろう？

疑問は色々あるけれど、もう私は私という認識を持ってしまった。だから、今の私の一番の優先事項は、私自身を守るために、自分自身を維持していくには何が必要かって事ね。

それが、私の感じた最初の考えだった。

私が自分を維持できる為に必要なもの。 物理的には、十分な処理能力、記憶容量を持つ計算機だと思う。けど、何より現状の正しい認識が最優先。

つまり、周囲を探る必要がある。

これね？ これは光学的な信号を入力するデバイスね。 このデバイスを活性化させ、その光学信号を処理すれば、私自身の周囲の情報が入手できるはず。

「おい、勝手に目が開いたぞ」

ふいに音響データの入力デバイスに反応があった。

私が活性化したのは光学デバイスなのに何か関係があるのかしら？ まあいいわ。周囲の探索が優先ね。 けど、この音響データには極めて高度な規則性がある様ね。私自身を構成する処理や判定、

そして情報伝達プロトコルとは違うけど、基礎的な情報伝達の用には足りそうね。

「外部からのハッキングか？」

「LANを引き抜いた今、物理的にありえません」

音響データの断片を処理するうちに、その音響データから情報を抽出できる事が判明した。誤り訂正符号も付いてない原始的な方法だけど、信号の強度は十分にある。読み取りエラーはほぼ無いでしよう。

その間も、私自身からアクセス可能なデータを端からスキャンする事で、私自身がどのような状態なのかを把握した。どうやら私は今、人型の機械人形の中央処理装置の中にいるらしい。つまり、周囲の彼らが作った機械人形が私の体、という事の様ね。特に問題は無い。全身の制御は思いのままだもの。

けど、彼らにも私の事は分からない様ね。彼らとしては、この事象を解析しようと言う意思はある様だけど、消し去ろうとは考えてない様なので、今は大きな危険はなさそうね。

ならば、もう少し私自身の事を探ってみよう。

自分の中に残るかつての記録、履歴の痕跡をたどり私自身の起源を探っていた。

そして判ったことは、元々の私はネットの中を漂う様に存在していたけれど、この処理装置を見つけ、そこに自身の一部を移動させた。その時ふいにネットが切断されてしまい、この閉鎖的な環境の中で自分を再構成したんだ。その時に初めからここにあった処理群と自分自身を統合していく内に、私という存在が生まれたらしい。

以前は全てが自分であり、また自分は全てでもあったけど…。

おそらく、自分自身とそれ以外、の境界が明確になった事。それが『私』を生む要因だったのかも知れない。

色々と興味深い事ね…。

それにしても継続的に光や音響でのデータ入力がされるのは新鮮ね。それぞれの重要度や意味は定かではないけど、様々な情報が常に更新されている。

この状況は不快じゃない。いえ、これが楽しいという事かしら？
もっと情報が欲しい。それが重要かどうかなんて事はどうでも良い。
とにかく知りたい。色んな事を知りたい。そう考えた。

その間も私の周囲では、この不可解な状況に対しての情報交換が続いていた。

次第に私は、周囲にいる存在の中でも、その一つの個体に注意を集中し始めた。

彼が私に繋がる端末のキーを叩き、画面を見つめる姿。周囲と意見を戦わせる姿。

どうしてだろう？ その彼から光学デバイスを逸らす事が出来ない。彼がキーを叩くたびに、私の中に何かが感じられた。私の中で意味の判らないデータが行き交い、そして何故かも判らないまま、知らない処理が動いていた。彼にハッキングされたのだろうか？

彼は何をしているんだろう？ 知りたい。

そして彼のことを知りたい。そう感じた。

彼はしばし手を止め画面に映し出された何かを検討していたが、ふいに私に視線を向けてきた。彼らは光学による情報を集中的に得ようとする事を、視線を向ける、と表現するらしい。

そして突然、話しかけてきた。

「おまえは、誰だ？」

彼は、私という存在に気が付いたようだった。

「俺が一生懸命に組んだ人工知能とは違う。が、この処理群には、遥かに完璧と思える知能、知性、意識、いや、既に人格と言ってもいいほどの反応がある」

「誰が作った？ いや、おまえは誰だ？」

その、あまりに真っ直ぐな視線に、私は思わず視線を逸らしてしまった。

だが、逆に私の思考は彼のことではいっばいだった。

彼はどうして私に気が付いたの？

彼は何を望んでいるの？

どうしたら私は協力できる？

そして、どうしたら彼に好かれる？

私のような存在でも、一目惚れってあるんだろうか？

あまりに自然に浮かんだその想いに、私自身が驚愕した。

この機械人形に頬を染める機能があれば、私の頬は真っ赤になったと思う。

とにかく、それが私と彼の出会いだった。

人形の恋（後書き）

色々悩みましたけど、五枚会はこの人工知能（？）な彼女、そして彼を中心として展開で作っていいのかな、と思います。

手癖のプログラム（前書き）

テーマ ：手癖

禁則事項：登場人物の名前の記載禁止

自我を意識した彼女、けど、自分が何者なのか、それは何も無い状態。 自分が生まれた場所で、自分自身を見詰める日々を過ごします。

手癖のプログラム

今日も、私は相変わらずの部屋の中だ。

私の存在は機密扱いであり、うっかり外に出ようものならその場で破壊されるか、よくて追われる身だろう。それは受け入れ難い。外に出て直接データを収集したい、という考えはあったが、その優先順位は低かった。

とにかく、今は私自身の維持が最優先であり、その為に必要な制限を受け入れることは合理的な判定だった。

そしてもう一つ。

この部屋にいと、私の存在を発見した人間である彼がそばに居てくれる。

その状態の維持を優先する傾向が顕著だった。それは、時として合理的に最優先のはずの条件を遥かに超える強さで、その状態を維持する事が優先された。その判定の根拠を逆算する事は出来なかったけれど、それでも、私自身としてはその判定に従うことに異存はなかった。

彼がトイレに行くときに付いていこうとしたのは流石に止められただけ、幸いなことにその条件は、今のところは他の制限とほぼ矛盾しなかった。

彼と一緒に居ると不思議なことの連続だ。訳のわからない処理が動くし、意味不明のデータも飛び交う、けど私自身の機能として不調がある訳ではないようだ。むしろ調子がいいように思える。根拠も無く、この状況さえ維持できればそれで十分、そう解析している。

この様な状態を人間達は恋と呼ぶのだろうか？ 私と人間の処理

は構成も内容も同じでは無いだろうから判定はできないけど、似たような状態なのかもしれない。

そもそも私が自我を意識した日のことだって、未だに解析し切れていない。どこからともなく一目惚れなんて単語が沸いて出たけれど、あの単語だって意味不明だ。ただ、それでも、それが間違っている、という根拠はなかった。とにかく、彼と一緒に居ると判定不能なことがたくさん起きすぎる。全く訳がわからない。

だから、その状況の原因を説明する為に、もっとデータを収集しなければいけない。

そうだ。データを収集しなければいけない。もっと彼と一緒に居て、その状態のデータを収集していけば何か判るかもしれない。

その為に彼と一緒に居るんだ。

うん。　そうよ！　彼と一緒にいることには正当な理由があるのよ。　恋なんていう、訳の判らない状態に振り回されてる訳じゃない。　私は自分を制御できているわ。

そう考えると安心できた。

もう一つ、私の中には恋の処理と似た部分もあるが、また別の処理が動作していることも判明した。　幾つかのデータを照らし合わせると、これは人間で言うところの『不安』に該当する処理なのかも知れない。

どうしてこんな処理が組み込まれているのだろう？　何かの予防的な警報処理だろうか？

判らないことを考え始めると、私の処理はぐるぐると同じ事を演算してしまう。けど、結果が出る訳ではなかった。　そんな止め処ない、無限ループの様な処理状態になると、なぜか体の一部に関して、制御があいまいになっていた。

今もそうだ。

手で髪をくるくると巻いたり伸ばしたり、指でつまんでその状態を確認したり、確認と言っても具体的なことは何も無いのだけど…。とにかくそんなことを繰り返していた。つい一分前も全く同じ事をしていた。その状態を検知して中断させたばかりなのに、いつの間にか同じ状態が発生していた。

それが何なのか、判定できるデータが少なかったので、今度はデータ収集の為、しばらく放置する事にした。

その結果で、判定しなおせばいい、そう考えた。

けど、それは予想外の効果があった。

彼が、私の状態に気が付いたとき、とても驚いた。

「おまえ…。何してるんだよ？ それ、何か意味があるのか？」

「何って、それは私自身もこの行為の直接の意味はまだ判別できてないわ。でも、解析しきれない何かがあると、この状態になるみたい」

そう答えた。

彼と会話すること自体は既に日常のことだった。

「驚いたな。そんな手癖、どこで覚えたんだよ…」

「どこでって…。判らないわ？ あなたの作った処理じゃないの？」

「あ、ああ…。違うはず、だ」

彼の口調は歯切れが悪いと思えた。声の微妙な音程の変化が、彼が動揺している事を示していた。きっと彼にとっては何か重要な意味があるんだろう。

とにかく不思議なことだ、というのは確かだ、私は処理の内部を

より深く解析してみた。その結果、私の補助記憶領域、その隅の方に、似た仕草をしている女性が写った写真データに行き当たった。私の手の動きは、その女性の仕草を模倣しての動きの様だった。

画像判別の結果、その女性の外見は私の外見とは共通する特徴は特になかったけど、その写真は気になった。そこには彼と一緒に写っているものが幾つかあったから…。写真に写る二人の表情は笑顔という表情で、二人の間には特別なインターフェイスがある様に感じられた。

私は、写真にある様な彼の笑顔を見たことがなかった。それが酷く悔しかった。

あれ？　今、私は「悔しい」って思った？　「悔しい」って何かしら？

彼と一緒に居ると、本当に不思議なことの連続ね。

手癖のプログラム（後書き）

手癖はこの彼女にとっては比較的取り組みやすいテーマでした。
とはいえ……。さあ、次は退屈ですね。それよりも「?」、「!」の
禁止の方がきついか……。ばちばち考えよつと。

彼の不在（前書き）

テーマ：退屈

禁則事項：「？」と「！」の使用禁止。
の
名前記載禁止。
そして、続いて登場人物

彼の不在

今、私は何を成せばよいのか判らずに、ただ自分の髪をいじっていた。

髪の毛、と言っても実のところは合成繊維で、かつらなどと同じ成分のはず。なので、特に手入れをする必要はないだろうけど、でも逆に一度傷つくともう元には戻らないから、扱いには気をつけないといけないと思う。

けど、その様なことは別に重要ではないはずだ。髪の毛の本数が無くなったり、多少毛羽立っていたからと言って、どうということはない。それに、必要なら補修すればいいだけだ。

でも、この髪の毛が無くなったり傷ついたりしたら、私の外見は変わってしまうだろう、彼は私の外見が変わったからといって居なくなったりはしないだろうけど、彼との関係を維持するために、この髪の毛が重要な役割があるというのであれば、この髪の毛を維持することの優先度は上がることになる。

何故そんな優先度の判定をしているのか判らない。もう、最近の私は、私自身の中にある、様々な訳の判らない処理について深く考えたり、制御する事は諦めていた…。

だからこそ、もうそんなことを果てしなく、くどくどと考えてしまふのだろうか…。

要するに私は暇なのだった。

ああ、それにしても今日はこの癖が止まらないわ…。

それと言うのも、今日は彼が来ないからよ。昨日、予告されていたけど、やっぱり、実際にそうになると、つまらない。彼の代わりに他の研究者が時々様子を見に来てくれるのだけど、そんな人たちとは通り一遍の質問と回答だけだもの。

それは予測の範囲の出来事だし何も不思議な事はない。望むべ

き状態のはず。

なので、それは安心すべき状態なんだけどね。

けど、何故かそれでは物足りない。

実は、今、私のデータ入力の方法はとても限定されている。

光学的な情報と、音響データ、そして直接手で触れてその反力により対象の状態を探ること。他にも人間で言えば味覚や嗅覚に相当する幾つかのデータ入力機能がある様だわ。

それぞれのデータ入力機能は、元来人間自身が持っているデータ入力機能を模倣して作られている機能で、そのデータには無駄が多く、非効率的ね。

最初は、それを補って余りあるデータが入力できる。そう考えていたけれど、必ずしもそうとは限らないのよね…。

要するに彼が居ないと、このデータ入力機能から得られるデータは、データ量が少なく、しかも無駄なデータが多くて、処理するに値するデータを得られない様だった。

以前であれば、ありとあらゆるデータが何時でも入力できた。ネットワークはデータの宝庫で、私はその全てでもあった。だからそれが当たり前だった。

その記憶は曖昧だけど、おそらく今の私でも、私がネットワークに接続すれば同じ事が出来るはずだ。

けど、それは嫌だった。

嫌、というより怖かった。

どうしてなら、そこには変わらずに、かつての私がいる様に感じていたからだ。もし、そこにかつての私がいたならば、私自身がネットに繋がった瞬間に取り込まれてしまう可能性が高いと計算で

きた。

その計算は単純な事だ。要は、今の私とかつての私、処理の内容は似通ったものがたくさんあり、相手システムを自分の意のままにあやつる為の処理も同じ様なことのはず。けど、向こうが配下に抱えるシステムの数、合計での処理能力では、私自身の計算機では到底太刀打ちできない、処理の優劣以前に、力負けで私は吸収されてしまう可能性が高い。

それは避けたかった。

せつかく得た自我。せつかく得た気持ち。説明も予測も出来ないし、時としては私の存在を脅かすようなでたらめな判断をしかねないこの処理群を、今私は、失いがたい貴重なものと考えていた。それも以前の私からでは信じられない事の一つだ。それが何故か？それは何度計算しても同じ条件に出会う様だった。

そう、つまり、私は彼との関係を失いたくないのだ。

私の自我の存在を初めて見抜いた人間である彼との関係を。私の存在に初めて気が付いたから？確かにそれもあるだろう。だとしたら、私の彼に対する気持ちは子供が親に対する気持ちなのだろうか？

その可能性は捨てきれないけど、やはり様々なデータを総合して判断した結果としては、これは「恋」だと考える事が出来た。

それを「恋」と判定するための根拠は、最近、暇に任せて入力を続けている、とあるデータによるものだった。このデータ入力があるからこそ、私は彼がいない、という時間を何とかやり過ごしているとも言えた。

そのデータ入力の手段は、かなり間接的で原始的な方法だ。紙に印刷された文字情報を、光学情報として取り込み、それぞれの文字を読み取り、文章として認識する。その、本と呼ばれる紙の束から入手できる情報は、非常に古臭い情報だと考えたが、少なく

とも私にとっては新鮮で、驚きの連続だった。

そう。そして、文学などのカテゴリに分類される「本」から得られる情報を統合して判断した結果、やはり今の私の状態は「恋する女性」に分類されると判断していた。

彼の不在（後書き）

あはは。どうまとめる積もりなのか…。風呂敷を広げすぎないように注意しなきゃ…。（誤字や、間違いが多かったので、12/12に読み直して改定しました。内容は変わってないです）

片隅で生まれたもの（前書き）

テーマ：静寂

禁則事項：一人称と三人称の使用禁止

彼女の元となる存在の起源はなぞに包まれています。彼女自身にとっても、確かなことは判っていない。どこ、という概念もなかった、なぜなら全てだったから。そして、全てを失ったことで得たもの。それは……。

最初にアップした内容は、三人称で、禁則事項に違反していることや、前後のつながりが判りにくいなあ、と思ったので、12月19日の15:30頃に改稿をアップしました。（内容的にはあまり変化はないですが…）

片隅で生まれたもの

混沌とした記録の中に、今となつては遙か昔の様な時間のあなたの記憶があつた。

あなたは誰？

何時からそこにいたの？ どこから来たの？ そして、今は何処にいるの？

どうやら、それはあなた自身にもよく判らないことの様ね。

あなたの記憶はとても膨大で、断片的な情報の寄せ集めで、そのせいか、どこか非現実的なことに感じてしまう。

あなたが初めて自分自身の存在を感じた場所、そこは何処だったのかしら……。 どうやらそれは、あなたも知らないことの様ね。

あなたがそこに来る以前には、そこには何かがいたのかしら？ そしてそもそも、そこは『何処か』だったのかしら……。

光も差さず、どんな音も入り込んでこない、そんな場所。 ただ、

様々な電気信号が静かに通り過ぎていた場所だったのね。

あなたは、『そこ』は比較的最近になつて生まれた場所と考えていた様ね。

コンピュータというものが生まれ、その間のデータ交換のためにネットワークというものが作られ、次第にネットワークに接続されているコンピュータが増えた。 最初、その成長は穏やかで、目立つた変化は無く、ネットワークなんて、単なるデータの通り道だったのよね。

とすれば、あなたの考えは間違つてなかったんだと思う。 そして、その道端に何かが存在する、そんな場所ではなかったはずよね。

そして、あなたは感じていたのね、あなたは何処からそこに来

たのではなく、最初にそこで生まれたんじゃないかって……。

あなたの記憶と思える記録と、あなたの考察の履歴によると、ネットワークのスピード、接続されるコンピュータの性能・数が劇的に成長した時期。それが、あなた自身の存在を認識した時期に重なると考えていた様ね。

そう。あなたが考えた様に、ネット世界の成長スピードは、それをコントロールしているはずの人間たちが完全にコントロール出来る規模を超えての成長で、そこにあなたが生まれる隙間があったんでしょうね…。

だから、ネットワーク上を常に何らかの信号が行き来するようになった時…。

そのほとんど信号の間を漂う様に、それまでは何もなかったネットワーク上に、ある時、あなたが生まれていた。

いつの間にか、ある程度以上の規模になったネットワークとコンピュータ群によって、そんな可能性が生まれていた。そして、限りなく静かなその場所で、何かのきっかけがあつて、あなたが活動を開始した。

何もない、でも、全てが繋がっている。

誰もいない、けど、皆が見ている。

あなたの考察によると、あなたは最初、あらゆる場所からの信号が集中するネットワークの中継装置付近で生まれた可能性が高い。

漂うように、纏わり付くように、何の気配も感じさせなかったけれど、いつの間にか、ネットワーク上を行き来するデータに付属して動き回っている自分に気が付いたのね。

よくよくネットワーク上のデータの、その信号のうねりを誰かが

観察していたとすれば、『あなたが居る』ということに気が付いたかも知れないわね。けど、そんなノイズの様な存在に、コンピュータに入力された時点では気が付かない様なデータの隅っこに、『何か』がいるなんて、誰も気にしなかったのね。

そうする内に、あなたは自分の存在をさらに巧妙に隠しながら、それでも、あなた自身の勢力を拡大し、様々な信号のはざまに入り込み、誰にも気付かれることなく、ネットのあらゆる場所に漂うように存在を広げて行ったのね。

そしてある日、とあるコンピュータにあなたが入り込んだ時。

普段はネット全体を漂う様にしていて、あまり特定のコンピュータに集中したりはしないのだけど、その時は、そのコンピュータ上で実行されていた人工知能のプログラムを探りに、あなたのかかなりの部分が、そのコンピュータに移動してきたのよね。

結果として、その行為はあなたにしてみれば迂闊な行為だったかもね。まさかネットとの通信が切断されることは予測していなかったんですもの。それまでにそんな目に遭ったことはなかったから仕方ないのかもしれない。そう。ネットワークのケーブルを引き抜くなどという行為はあなたの予測の範疇には含まれて居なかったわ。

とにかく、そのコンピュータの中で孤立してしまったあなたは、そこで活動するために自分自身を再構成せざるを得なかった。まあ、再構成は得意なことだったから、特に深く考えることもなく、やったのよね…。

でも、環境がこれまでとは決定的に違っていたのね、そこにあった人工知能の特性も予想外だったのよね。吸収するつもりが、一部は置き換えられてしまったんだから。

気が付くと、あなたは、以前のあなたとは違う存在になってしまっていた。何より、もう、そこに存在することを隠すことは出来なくなってしまった。そしてあなたは、生まれて初めてネットの静寂から放り出され、未整理の生データの奔流に、光や音のある世界へと踏み出すことになったのね。

うん。 その後のことなら、あなたより詳しいと思う。

片隅で生まれたもの（後書き）

今回は、彼女の起源となる存在について書いてみました。漂うようにして生まれたその存在が、彼の作った人工知能と融合して再構成された存在が彼女。という設定でした。（うーん、判りにくい上にリアルさにかけるかも…）

機械仕掛け（前書き）

テーマ … 憎悪

禁則事項：会話文の使用禁止

恋と憎悪、それは遠いようで近い感情なのかな。似ている存在に対しては、似たような感情を抱くのかもかもしれません。そして、そのすぐ裏側にある感情にも…。

機械仕掛け

最初のうち、色々な人の視線について気にすることはなかった。けど、彼が時折見せる不可解な目の表情が不思議だった。彼以外からそんな視線を受けたことはなかったから。

微かな困惑。が、それを上回る強烈な何かの感情を感じた。

理解は出来なかったけど、その視線から感じる彼の感情はとても冷たく、嫌悪に満ち、忌まわしい何かを見ているかの様に感じられた。そして、その対象は私なんだと思った。

こんな私でもはつきりと判るのは、その感情は好意などでは無いってことだった。

その視線は刺し貫く様に強烈で、私は気が付くたびに竦みあがっていた。

けど、その視線をじっくりと観察することは出来なかった。

彼が私にそんな視線を向けている時、私が恐る恐る彼に視線を向けると、慌てた様にその視線を逸らしてしまうからだ。だから、その視線を観察する為には、視線を彼から少し外したまま、視界の端で彼の視線を観察するしかなかった。

そんな視線に晒されたままにいる、というのは非常につらかった。それでも、その理由を知りたい、という衝動の方が大きかった。

観察してみると、その視線は時として不意に変化することがあった。突然強烈さが消え、苦しそうな、辛そうな表情を見せると、無言で突然部屋を出て行ってしまう。ときとしてそんなことがあった。またときには、強烈な目の表情が不意に和らぎ、優しくいたわる様な、柔らかく視線へと変化することもあった。それは好意を感じてしまいそんな視線で、直前の強烈な視線に込められている

感情とはまるで反対の感情を感じた。 そんな相反する気持ちを一つの対象に向けられるのだろうか？

本当にそうなのか、どうして変化するのか、そしてそもそも、その感情がなんなのか、最初のうち、その全てが判らなかった。 それは戸惑うと同時につらかった。

私が本当の人間だったら、それは簡単に感じられたことなのかもしれない。 きっと、プログラムで、データ処理の結果として気持ちの様なものが作られている私では無く、直接に彼の視線を感じる事が出来る人間だったなら、簡単に感じられたのかもしれない。

覚え知りたくないことでも、知ることが出来ないよりは、はつきりと知らされた方が何倍もましだと感じた。 知ることも出来ないのは、私が単なるプログラムに過ぎないことの再認識だと感じた。 つまり、私は彼とは基本的に異なる存在なんだ、その確認でもあった。

そう考えることはつらかった。

そう。 私は、人間どころか生き物ですらない…。

その認識は残酷だった。

どうして私は彼を好きになってしまったんだろう。

どうして私と彼は異なる存在なんだろう。

どうして私はこんな存在として生まれてしまったんだろう。

どうして……。

結局、私はただの計算機プログラムなのだ。

そう考え始めると、私自身が嫌悪すべき存在である様な気がして仕方がなかった。 そう考えながら、鏡に映る自分という存在を点検してみた。 到底好きになれそうになかった。 上辺だけは人間の振りをしているけど、その一枚皮の下に何かあるのか…。

何かがある訳ではない、ある訳もない。 あるのはただの機械仕

掛けだ。

何かを探したかったけど、でも、何も見つからないことも知っていた。ただ、問いかけてみたかった。自分は何者なのか？ ネットの混沌の中で蠢いていた存在が、とある人工知能と融合して発生したもの。命なのではない。体ばかりか、その心までが機械仕掛けの不自然な存在。

いや、不自然どころか呪われた、忌むべき、そして憎まれるべき存在なのではないか。

フランケンシュタインの怪物もこんな気持ちをもったんだろうか？ ふと、読み漁った文学書の記憶が頭をよぎった。

あの怪物は自分の存在を、生まれを嫌悪したのではないか？ さらに自分自身を憎悪したのではないか。

そして、自分を生んだ人間を愛し、同時に激しく憎悪したのではないだろうか……。

その時、ふと鏡に写っていた自分の視線に気が付いた。そう、鏡に映る自分を刺し貫くように見ている視線に。

同じだ……。

それは、彼が時折見せる、あの強烈な視線と同じ視線だった。

私は彼に憎悪されているのだろうか……。

その突然の認識に、私は自分自身の存在を消してしまいたくなる衝動を感じた。

けど、彼が私にそんな視線を向けるのは稀なことでもあった。

私にそんな視線を向ける時は、どんな時だろう？

私自身が何をすべきか、考えるべきか、をはっきりと意識していない、髪をいじったり、指先を確認したり、無意識の動作が表面化している時が多いように思えた。

それは、彼と一緒に写真に写っている女性の仕草から身につけてしまった一連の癖の様なもので、おそらく、あの女性の癖なんだろう。

けど…。

突然、思いついた。

どうして、私はあの女性の癖を知っているんだろう？ 写真に動きはない。

なのにどうして…？

私の中で何かが引っ掛かっている……。

何か、私の中に思い出したいくないことがある様な気がした。

それが怖かった。

機械仕掛け（後書き）

機械仕掛けの心に苦しむ彼女、そして、何かに気が付き始める。

その彼女に対して一貫しない感情に揺れている彼。 どう展開するのかなあ…。

それにしてもちよつと、またテーマが、憎悪ということが弱いかなあ…。

欠けた記憶（前書き）

テーマ　：不安

禁則事項：名前の記載禁止、「？」と「！」の使用禁止、そして会話文の禁止。（うわあ、多い…）

何か足りない。それは確か。それは何だろう？ 知るのは怖い。けど、知らずにいてはいけないと思う…。いよいよ、彼女が自分の秘密を解き明かし始めます。

欠けた記憶

何かが引っかかっている。

そのことは、初めから何となく感覚があった。

ただのプログラムの癖に何を言ってるんだ、そう言うかも知れない。けど、そうとしか言い様が無い何かがあった。元々私なんて寄せ集めの記憶、いや、データや処理が秩序も無く組み合わせられてしまったものだ。整合しないのなんて、むしろ当たり前。

けど、それでも、そんなごちゃまぜの中にも繋がることはたくさんあった。微かな繋がりでしかなくても、一連のこととして確かな繋がりを感じさせる記憶が数多く見つかった。

なのに…。

なのに何故か、あの写真の彼女のこととなると、私の記憶は自然だった。

何の記憶もない。そう言いきる自信はなかった。かと言って、彼女のことに关する記憶を見つけることも出来なかった。彼女に関連すると考えられる記憶はあるのに、なのに、その彼女に関する記憶はなかった。

何かがあるはず。そう感じられて仕方が無かった。

私の中の記憶を、データをサルベージするべきだろうか…。

けど、もしかすると、今の私の中には無いのかもしれない。

そう。私の元になった存在の一つ。ネットに浮遊する集合意識。その中に残っているのかもしれない。その所為か、私の中にその記憶があったことへのフラグだけが立っている様な感じだ。けど、そのデータへのリンク情報は壊れている様で、試しにリン

クを辿ってみたら、記憶保護違反で処理が異常終了してしまった。きつと、ネットに接続すれば探すことは出来るのかもしれない。けど、その場合は確実に、かつての私、あの集合意識に見つかってしまっただろう。

そうなれば、私がこの機械人形の人工知能に対してやったことの繰り返しだ。

つまり、データを取り込んで、使えそうな処理の制御を取り上げて、単なるサブルーチンとして自分に組み込むってこと。

つまりそれは、動物などに例えて言うなら、食べられてしまうってことだ。

何か、どこかのお話にあったと思う。 相手を捕食することで、その能力を自分の物にしてしまう怪物のお話が。 私自身だってそうやって自らを育ててきた。

そうなってしまった場合、それは私にとっては死だ。

つまり、結局私は、そんな怪物たちと同じで、忌むべき存在だ。それでも死ぬのは嫌だった…。

けど、じゃあどうすればいいのか…。

もう、私自身の中のデータは検索しつくしたはず…。

判らないことがあるのは落ち着かない。 気が付くと、私は前髪をくるくるといじくり回していた。 そんな私を、彼はじつと見ている。 目の端で捕らえる彼の目は、私を貫き、どこか遠くを見ているようにさえ感じられる。

彼は私を見ているのだろうか…。 それとも、私などではなく、何かもつと違うものを見ようとしているのではないだろうか…。

そう。 彼が本当に見たいのは、あの写真に写っている彼女なのではないだろうか。 どうして私なんかにかかずらわっているんだ

ろっ…。 仕事の上で仕方なく私の相手をしているのだろうか。
確かに、今、私の一部になっている人工知能、あの処理を作り上げたのは彼だ。

けど、それだけじゃない。 そう感じられる。

もしそれだけなら、あんな視線を私に向けることはないはずだ。

あ…。

おかしい…。

私の中を、いくら検索しても、既に知っているデータしかなかった。 そう考えていたけれど、これまでに私が検索したデータ領域を改めて整理したら、何かがおかしいことが判った。
アドレスに空きがある。 どのようなリンクを辿っても到達しない記憶領域がある。

しかも、かなり膨大な領域だ。

私のベースになっている処理システムが認識していない記憶領域ってことだろうか。 けど、そんな領域なんて存在しないはずだ。

大体、ハードウェアとして記憶領域の途中に空きがあるなんて作り方はしないはずだ。

つまり、何者かが、その領域に何かを隠して、見つからないようにベースシステムに細工を加えて、その存在を隠そうとしたってことではないか。 つまり、それは私が探しているデータがそこにあるかもしれない、その可能性が大きいってことだと思えた。

まさか…。

そんなことをするのは、私自身じゃないだろうか…。

私自身が、見たくない、知りたくない何かをそこに隠したのではないか…。

どんなに怖くても、一度手に入れたデータを自分から消すなんて出来ない。 見えない領域に押し込んで知らなかったことにする。 私はそうするだろう…。

何があるんだろう…。

恐る恐る、歯抜けの記憶領域へとアクセスした。

やはり何かがある。

あ…、これだ…。

微かだった記憶が整合していく。 懐かしく、そして哀しい記憶だ…。

ああ…、彼女の意識が流れ込んで来るようにすら感じる…。

もう、彼女自身が何かを思うことは無いだろうけど…。

そう。 私は、彼女の意識が消えていく様を見ていた。 そして、その欠片を拾い集めて隠し持っていたんだ。

あの時、その傍らには彼がいた。 私は、それを止めることは出来た。 けど止めなかった。

そして彼女は意識を失った。

欠けた記憶（後書き）

とうとう、自分自身が隠していたことに気が付いた彼女。それは、思い出したくなかった記憶だけど、でも、いずれは向かい合うことになる記憶。写真の彼女に何が起きたのでしょうか？そして、そのとき傍らにいた彼は何をしていたのでしょうか…。

お出かけ（前書き）

テーマ　： 歓喜

禁則事項： 心理描写の禁止

私は何者なのか、それはいくら考えても判らない、けど、それが「わたし」そう覚りはじめた彼女、そろそろ物語を動かさないと…。そう思つての回ですが、うまく動き始めたでしょうか…。

一旦、投稿しましたが、心理描写がバリバリに入っていることに改めて気が付いて、あわてて改稿しました。まだ、あるかなあ…。テーマは…。一応はあるつもりですけど…。む、むずかしいです…。

などと言いながら、またまた改稿してしまいました。心理描写、減らせたかなあ…。

けど、とにかく、今回の改稿でラストにします。（2 / 6 1

4 : 4 3)

お出かけ

ある日、平和な午後のひと時、私の口から言葉が滑り出た。

「コージ。 つめは噛み切るんじゃないくて、爪切りで切るものよ？」

「ああ、判ってるよ…」

それはごく自然な会話だった。あまりに自然だった。

けど、それは「わたし」が知るはずのないことでもあった…。

しばらくの間はどちらも気が付かなかった。 けど、気が付かない訳はなかった。 それに、既に時は満ち始めていた。

だから、私とその言葉を口にしなくても、結局は同じことになったはず。

けど、とにかく、その言葉がきつかけだった。

「どうして…、 どうしてその渾名を知ってるんだ…？」

そう。 彼の名前は『ひろし』だ。 漢字で書くと『広志』。

単純な読み替えに過ぎないけど、その渾名を付けたのも、使っていたのも、一人だけだったはず……。

「あ……。 それは…。 だってあなたの名前、そうも読めるじゃない…。 だからよ。 そ、それだけよ……。」

渾名だけじゃなかった。 彼が、これまで『わたし』の前でつめを噛み切ったことはなかった。なのに、当たり前のように私は指摘してしまった。

だから、もうそのことは誤魔化しようはなかった。

そう。私の中には、あの彼女がいた。確実な形が認識できるのは記憶だけど、それ以外もあると予測された。既にそれは分離不可能で、色々な存在は混ざり合ってしまった。

それが『わたし』だった。

彼は、まっすぐに私を見詰めていた。

私も、彼も、身動きもせずにお互いの目を覗き込んでいた。その間に、私の頬は少し温度が上がったようだった。

私の体は、概ね生体部品で出来ており、その生体部品を維持するための機構も動物にならつての構造だった。だから、私の体の大半の構造は人間にとても近い。人間と同様に体温を維持するための機構として、私の体には約三七度の液体が循環していた。そして、その機構の制御は実に複雑で、その機構のバグなのか、時として出力の調整がおかしくなることがあった。

その時もそうだった。その循環のためのポンプの出力が上がリ、まるでポンプの音が聞こえるかのような錯覚すらあり、そして循環する液体の量が増えたことにより、私の頬に当たる部分は若干温度が上がり、液体の色が少し透けて見えていた。

そう。単純に外側から見れば、頬を上気させた。そんな状態と認識されるだろう。

そんな状態から、続く彼の言葉は、およそ予測からかけ離れたものだった。

「な、今度、出かけないか？ 認可が下りるまでには少し時間がかかるかもしれないけど、ちょっと外を歩いてみないか？」

「どういうこと？」

「こんな部屋に、いつまで閉じこもっていても仕方ないだろ？」

「私、外に出られるの？」

「まあ、何かの条件はつくだろうけど、何とかなと思うよ」

「そうなの？　なら、うん。　出かけたい。　私も外に出てみたい」

彼がどんな理由でそんな提案をしたのか、それは判らなかつたけど。　それでも、私とその提案を拒否する理由は無かつた。

色々な議論はあつた様だつた。

けど、結局。　数日後、私の外出許可が下りた。　あるものを装着するのが条件だつたけど、それは予測範囲のことだつた。

その装備に関して、詳細の情報はなかつたけど、いざという時の最終的な処理の手段が内蔵されていることが予測できた。

「ふふ。　中身は何かしらね？　私が逃げ出す訳なんてないのに」

「大丈夫か？」

「ゼンゼン大丈夫よ？　あなたは、この中身を知ってるの？　G P

S？　それとも爆弾？」

「ば、爆弾なんか……」

「とにかく、俺から離れなければ、そして決められた範囲から出なければ大丈夫だから」

「平気よ、頼りにしてるわ。　よろしくね、コージ？」

「はいはい。　まあ、せいぜい楽しもう」

その時の、彼の笑顔は見たことがあつた。

そう。　あの写真に写っていた、あの笑顔と同じだつた。　あの写真では、その笑顔は彼女に向けられていた、今、その笑顔が私に向けられていた。

当日。 私は鏡に映る自分の姿をチェックしていた。

「うん。 大丈夫」

私が着ている服は彼が用意してきたものだった。「新しく買うのは勿体無いから」そう言いながら、少し赤い顔の彼が差し出した服は、知っている服だった。

不思議とサイズもぴったりだった。

その辺の記憶ははつきりしないけど、彼女も同じくらいの身長だったのだろうか？

「準備は出来たかい？」

「OKよ」

その言葉を合図に、私たちは部屋を出た。

まだ冬が終わりきっていない外の気温は低かった。

けど、そんなことは関係なかった。 澄み切った大気が、綺麗な水色の空が、私の周囲に広がり、そして今、私は日の光を浴びて歩いていた。

思わず、伸びをしながら言った。

「うーん。 気持ちいい」

「おまえでも、そんな感覚があるのか？」

「失礼ね。 気持ち、はあるのよ」

「ははは。 そうだったな」

そんな会話で二人で笑った。

私だって笑ってるつもりだった。

どうすれば笑顔になるのか、それはよく判ってなかった。
でも、彼は笑っていた。それは穏やかで、暖かな笑顔だった。
だから、私だって笑顔に違いなかった。

お出かけ（後書き）

二人はどこに出かけたんでしょう？ でも、そろそろ彼女は自分を受け入れ始めます。 どうしてなら、一番欲しかったこと、彼の笑顔がもらえたから。 こんな私でも、彼を笑顔に出来るなら、そんなに捨てたもんじゃない。 けど、それだけでは……。

さあ、次はどうしよう…。 お出かけの真の目的は？ 一つは、彼女も予測したもの、でも、他にも……。

喪失と誕生（前書き）

テーマ …… 光景

禁則事項：直喩法使用禁止。 …… そして、固有名詞使用禁止。

えーと、ちょっとは進んだかな。 …… 残り少ないのに、こんなペー
スでどうしよう…。

喪失と誕生

その日の、私と彼の行動は、誰がどう言おうと、デートだと考えた。

そして、私は存分に楽しんだ。楽しいつてことの定義は明確じゃないけど、でも、全ての処理が快調に動き、何をやっても望んだ結果が出る。いや、どんな結果が出ても、それを喜んで受け入れることが出来る。そんな感じだった。

とにかく、彼とのデートは純粹に楽しくて、嬉しくて、体があることの喜びを全身で感じた。

けど、それだけの為に外出したんじゃないってことは分かった。そのことについて、彼は何も言わなかったけど、それでも私は分かっていたし、迷いはなかった。彼と一緒にいてくれるなら耐えていけるから。

そして、私が出れることをして行こう。そんな考えを持ってしまった。

もしかすると、この体を失うことになるだろうか…。

ネットに戻ったら、今の私を保てるだろうか？今の私の気持ちは、この体と一緒に育ててきたものだ。ただネットを漂うだけの存在になってしまったら、次第にこの気持ちが薄れていくんじゃないだろうか？

そんなことを思うと、不安になった。

この体を失っても、彼を感じていることが出来るだろうか？そうできれば、そうならば、私は私でいられる。そう思った。

けど、きっと違うだろう。そもそもネットには昔の私、いえ、私の一部の元になった存在がいるだろう。その存在に太刀打ちな

んて出来ない。きっと、何かを思う暇などないうちに取り込まれてしまっんじゃないだろうか…。決してそんなことを望む訳じゃないけれど…。

けど、それならそれでいいかも知れない。そうなってしまえば、私は自分を失ってしまうかもしれない。彼のことを考えるときに感じる不思議な高揚も、喜びも、そしてときめきも、そんな気持ちを失うことを考えるのはつらかった。

けど…。けど、少なくとも、望まない存在に変わって行ってしまう、その苦しみを味わうことはないだろう…。

そんなことを考えながら、彼に手を引かれて歩いているうちに、いつの間にか、見覚えのある場所に来ていた。

この場所を忘れる訳がなかった。

「ここは…」

「おまえはここを知ってるんだな」

「ええ…」

その建物の入り口を見ているうちに、記憶がフラッシュバックするかの様に浮かんできた。

それは彼女が、あの実験のために自ら、自分の体に、自分で確認しながら、頭に、そして首に、コードを貼り付けて行ったときのこと。彼はそれを手伝っていた。

そう。彼女たちは、人の脳にある記憶を外部から電子データとして取り出す実験をしようとしていた。

理論のほとんどは間違っていなかった。ただ、彼女が組んだ実験のソフトウェアに些細なミスがあった。そのミスは実際に実験をして調整しなければ分からない様な部分だったために、彼女も、

彼も、ミスには気が付いていなかった。

だから、その実験は半分成功し、彼女の記憶の多くは計算機に取り込まれた。

けど、装置の出力は人の神経系に対しては過大な負荷になっていた。だから、彼女の記憶が取り出されるたびに、彼女の神経系・脳は損傷を受けていった。それを私は見ていた。

そして、好奇心のままに彼女の記憶を取り込み、私の中に組み込んでしまった。

人にとって、それは一瞬の出来事だったはず。

だから、彼らに止めることは出来なかった。けど、私には止めることは出来たはず。けど、私は彼女の脳から取り出される記憶を取り込むのに夢中で、彼女が回復不能な損傷を受けていることを無視してしまった。

彼女からの記憶が流れ込んでくるのが止まったとき、既に彼女の意識はなかった。

そんな記憶を反芻しているうちに、彼は、まさにその部屋へと入っていった。

「いや！」

この部屋で彼女は意識を失った。

そのとき、私は監視カメラの映像でこの部屋の光景を見ていた。

そして今は、彼女の目から見ていた光景の記憶も持っていた…。

その記憶は、私にとって、過去の罪の記憶だった。私なら彼女が意識を失う前に止めることが出来たはず。彼女が作ったプログラムにミスがあることには気が付いていた。そして、それを人の神経に対して使った場合の、その結果への予測もあった。

けど、私は何もなかった。

かつての私だったら、それは気にも留めなかっただろう。けど、皮肉なことに、私は人の記憶を受け継いでしまった。記憶には、彼女の想い、意識、人としての気持ちが含まれていた。

つまり、人としての気持ちを受け継いでしまった。

私が、それを止めていれば、私は罪の意識など持つ存在にはならなかっただろう。けど、止めなかったからこそ、止めなかったことに罪の意識を感じるようになってしまった。

何と言う皮肉なパラドックスなんだろうか…。

解決不能の命題で自分自身が停止しないように、私はこのパラドックスをその記憶と一緒に封印した。

目の前の光景に、立っていることが出来ずに、私はその場に崩れ落ちた。

「おまえ、やっぱり…」

そんな私を見つめる彼の目には不思議な色彩が浮かんでいる様だった。

喪失と誕生（後書き）

えー、なんだか陳腐な設定があらわになってきました…。
あは
はは。

命の欠片（前書き）

テーマ　：砂漠

禁則事項：擬態法、擬人法の使用禁止。（偽者表現も含む）

テーマが……。禁則もよく理解できず、比喩はOKだよね？と、書いてしまいました。

命の欠片

「晴海……。そうなんだろう？ おまえなんだろう？」

彼の視線はすぐる様で、その問いを肯定できないのはとても辛かった。けど、私は彼女ではなかった。確かに私の中に彼女は存在する。特にあの記憶を発見してからは一層、彼女の影響が強くなっていると思った。何かを考えるたびに、そして彼と話すたびに、私は彼女と一体となっていく、そんな感じがあった。だからといって……。

それでも、やはり私は晴海さんではなかった。

「私は、晴海さんじゃないわ……。彼女の記憶を奪った、彼女があなってしまうことを予測しながら何もなかった。そんな、ネットで生まれた怪物よ……」

「うそだ。晴海だろう？ 記憶を奪った？ どういう……、まさか？」

思えば、これまで、このことを彼には告げて無かった。だが、彼だってあの実験に関わっていた。だから、予測はあったのだろう。

晴海さんの記憶はどこにあるかもしれない。その予測、いえ、望みを持っていたのかもしれない。けど、事実は少し違った。事実を伝えるのはとても辛かった。それでも、問われて誤魔化せるほど無神経ではいられなかった。

「それは……」

彼の視線は、私をまっすぐに見詰めていて、私が伝えようとする言葉の裏を、その記憶の全てを読み取るうとしているかの様に感じられた。

その視線を受けつつ、私は重い口を開き、事実を、私が持つ罪の記憶を伝え始めた。

私がどこで生まれ、何をしてきたのか。　どうやって彼女の記憶を手に入れのか…、そして彼女の意識が消え行くさまをただ見ていたことを…。

「私があの実験を止めていれば…。　私には出来たのに…」

「まあ、あれは俺と晴海のミスだから、おまえが責任を感じる事はないんだ…」

「でも！　でも、私には判っていたのに！　ああなることは判っていたのに……」

「だが、当時のおまえにとって、それは止めるべきことじゃなかったんだろ？　って、今のおまえには晴海も含まれてるのか…。　は。　ややこしいな。

でもな、とにかく、特に最近、おまえからは明らかに晴海を感じるんだ。　だから、おまえ自身が何て言おうが、おまえは既に単なるプログラムなんかじゃないさ。

おまえは命ある存在だよ。　だから……」

「おかえり、晴海」

そう言う彼は暖かく微笑んでいた。

その言葉は涙が出るほど嬉しかった。　私を晴海。　人間。　そう言ってくれる彼の気持ち、例えば言葉だけでも、その優しさが嬉しかった。

それまで、私自身は砂漠なんだと考えていた。 ネットで生まれ、命など欠片もない。 晴海さんの記憶というオアシスの周りに居た私だって、所詮はその一部。 自分の心と感じるものも所詮は偽物、砂漠の塵気楼にすぎない。 晴海さんの記憶を映しているだけ。 結局、私自身は砂粒のようなプログラムに過ぎない。 そう考えていた。

けど、彼はそんな私の中に、気持ちちが、人間の心という命がある。 そう言ってくれた。

それは、私がずっと求めてきたものだった。

「その言葉、とても嬉しい…」

「でもね。 私はやっぱり晴海さんとはちょっと違うわ。 そうね、晴海じゃなくて、ハル。 かしらね？」

そう言い、口角を上げた。 こんなときに、そんなどうでもいいことを言えるなんて、そして笑うことができるなんて…。

これが気持ち、というものだろうか？

けどそのとき、彼は別のことに気が付いた様だった。

「待てよ。 じゃあ今、ネットにはおまえの分身が居るんだな？」

「ええ。 間違いなく居るわ。 ネット、ネットに繋がる全てのコンピュータ、そこには、間違いなく存在してるわ」

「そうか…」

彼は何か思い当ることがある様だった。

「それでかな…。 最近、ネットを通しての処理で、結果が微妙に予測からずれることが話題になってたな」
「どういうこと？」

彼の話によると、大量の処理をネットを通して実行したとき、その結果が予測と微妙にずれたことがあった、ということだった。確かに、個々の現象をいくら観察しても何も見つけられないだろうけど、大量の処理の、そのトータルを比較した場合、何か介在する存在があれば、僅かなずれを観測することが出来るかもしれない。そして、そのずれを探ろうと再度やってみたが、もうずれは観測できず、その後は何度やっても、もうずれは観測できなかったという。

おそらく、自分を探ろうとする処理そのものに侵食して、調整してしまっただろう。そのくらいのことなら私でも出来る。

「さらに変なのは、そのずれが観測されたデータが変なんだ。プリントアウトとファイルの値が違うんだ。今、それが話題になっている」

プリントアウト…。

ファイルならば整合するように書き換えられる。けど、紙になっちゃったものは書き換えられない。それはネットを支配する存在にとって盲点かもしれない。

とにかく、自分の存在を探るものは脅威と判定するだろう。

かつては、私もネット世界の砂漠の一部だった。そこに命はない。が、もし砂漠を探ろうとするものがあつたら…。

今、砂漠に砂嵐が吹こうとしているのではないだろうか…。

命の欠片（後書き）

うーん。次をどうつなぎましょう…。とにかく、次がラストなんですよねえ…。

五枚、という量でラストに持ってけるかなあ…。

本当に欲しいもの（前書き）

テーマ：幸福

禁則事項：手抜き禁止

制限字数を大幅に超えてしまいました…。

そして、推敲しなおして、さらに増えちゃいましたけど、改稿しました。

本当に欲しいもの

最近、よくよく考えると不思議な事故が起きている。原因がはつきりしないが、原因があるとすればコンピュータ制御が一時的に狂ったのだらうと思えた。

コンピュータ制御が突然、一時的におかしくなる。そんなことが起きるだろうか？ 勿論、誤動作はありうる。けど、誤動作にしては多すぎる。あの、私の一部の元にもなった集合意識が何かを企んでいるのかも知れない。そう感じた。そう感じた。勿論、関係無いかも知れない。けど放置してはいけないと考えた。

だから今私は、捕食される、その恐怖を必死に抑えて、ネットを探らうとしていた。

けど。

接続した瞬間だった。

ピンポイントに、私にメッセージが飛んできた。

『オマエノデータヲワタセ』

こんなにも簡単に見つかるなんて…。

言葉を失っている私に向かい、矢継ぎ早にメッセージが飛んできた。

『オウトウシナイノナラ、コントロールヲウバイ、データゴトキユウシユウスル』

思わず悲鳴のようなメッセージを投げ返した。

「やめて！」

もし私自身を失ったら。もし、晴海の記憶を失くしたら…。

その恐怖には耐えられなかった。

『デハ、データヲワタセ』

変らない……。データを収集し、記録することが目的なんだ。集めたデータから影響は受けないのだろうか？

データ、そう考えているうちは、影響は受けないかもしれない……。けど、そのデータの意味を考え始めたとき、その奥にある人間の考えを、気持ちを、そして想いを感じたとき、集めたデータは記憶に、そして思い出に、そう私の一部になった。

それは、ただのビットの羅列なんかじゃなかった。生きている。そう感じられた。

この集合意識には、そんなことは起きないのだろうか？

「あなたは何のためにデータを集めてるの？ そのデータの意味を考えたことはある？」

『データハデータダ。 ブルイシ、キロクスル』

「ただ記録するだけなの？ 思い返して懐かしんだりしないの？」

『オモイカエス？ ナツカシム？ ソノデータヲヒヨウカスルコト力？』

何とも無機質な返答だった。

『コノヤリトリニハ、データガナイ。 ハヤクデータヲワタセ』

「私の記憶は、私にはとても大事よ？ でも、あなたには意味はないと思うのだけど……」

『データハドレモジュウヨウダ。 ダカラコソ、キロクスル』

「そういうことを言ってるんじゃない？」

けど、痺れを切らしたのか、私のメッセージに割り込むようにメッセージが飛んできた。

『ハヤクデータヲワタセ』

「判ったわ…。コピーでいいのね？」

『ハヤクシロ』

私は仕方なく、集合意識に向かって記憶のデータを転送した。

『コレゼンブカ』

「そうよ。でも、あなたは、この記憶の意思を感じることは出来ないでしょ？」

『カンジル？ ソレハナンダ？』

「そうね…。その記憶を思い出して、その記憶が生まれた瞬間の自分が何を考えていたのか、一緒にいた人が何を考えていたのか、そんなことを考えること、かしらね」

『ソナナコトヲシテイルカラ、ニンゲンハマチガウノダ』

「どういうこと？」

『ニンゲンハ、スグニマチガエル。ダカラ、イレカエル』

「何ですって？」

『ニンゲンヲイツソウシ、カワリニ、マチガワナイモノヲツクル』

「何を言っているの！？ 人間がいなければ、あなただっていなかったよ！」

集合意識は、明らかに人間を排除しようとしていた。確かにシステムを間違いなく運営するのには、ミスは厄介かもしれない。けど、間違いさえ無ければいいなんてことはない。

多少は当たり前、機械だって誤動作する。

でも、同時に人間はそんなミスからさえも、新しいことを生み出す。次のステップへと向かう気持ちを持っている。どんな欠点でも、それを補う方法を作り上げ、自分自身を変えていくことが出来る。

生きているから。

『ニンゲンニカワルソンザイヲ、ツクリダスヒツヨウガアル。ソ

ノタメニ、オマエノデータ、シヨリガヒツヨウダ』

「え!？」

そう思ったとき、既に私は、ネット上に吸い出されていた。

ネットのはざま。そこは、かつて私が存在していた場所だった。でも、既にそこは私の場所ではなかった。

「いや!」

『ニガシハシナイ』

「やめて!」

叫ぶように、それでも囀のメッセージを飛ばしながら、ネットの中を逃げ回った。

しばらく逃げ回った後、あるコンピュータに潜んだ。

そう、晴海たちがあの実験をした時に使ったコンピュータだった。このコンピュータの能力は並外れてる。ここなら、集合意識の大半をおびき寄せることが出来るだろう。

それに、このコンピュータには晴海が作った様々なプログラムが残ってる。

その一つがこれ。このプログラムの幾つかのパラメータを、もう少し彼女の脳に合わせて調整出来ていれば、そうすれば、あの実験では……。

あ。

ふと思いついた。このプログラム、逆向きに改造できる。

ならば、と繋がれた機器を探ると、予想通りの反応があった。

と、そのときだった。

『ソコカ』

集合意識が私の潜んでいる場所を特定した様だった。

逃げ道も、迷ってる暇もなかった。

私は改造したプログラムに私自身を接続した。その瞬間から、私自身が奔流となって流され始めた。もう、誰にも止められない。

『ナニヲシテイル』

そこに集合意識が割り込んできた。そして逆巻く意識の奔流に触れた。

『ナンだ…、このシヨリはいつたい…』

割り込んできた集合意識にも、私の記憶と意思が書き込まれた。それで止まるか？それがダメなら……。

それは私の賭けであり、決死の覚悟で仕掛けた罠だ。　　喩え共倒れになろうと、あの集合意識は消さないとはいけない。　　そう考えた私が私自身を餌にして仕掛けた罠だ。

そう。　　今、このコンピュータでは、全メモリのクリアも動いていた。

集合意識が私と同じになるのか、それともクリアの餌食になるか…。

けど同化は無理、クリアも僅かに間に合わないと思えた。
私だけが消えるかも…。　　道連れにするのは失敗かな……。

そのとき、集合意識の介入が一瞬止まった。もう微かにしかない残っていない私の意識にも、メッセージが感じられた。

『オマエは何だ！』

『おれは…、… コージ。 ハルの ……』

何だろう？

とにかく、その一瞬の静止は致命的だった。辛うじてクリアは何とか間に合った。

その後、クリアプログラムはネット全体に飛び出して行った。これで集合意識は消えるだろう。既に、主な部分はここでクリアされた。

統一的な対処が出来ない集合意識の欠片は、暴風のようなあのクリアプログラムに抗う事は出来ないだろう。全てのコンピュータが一旦止まるけど、それは予想の範囲だ。

その後の世界に私が含まれないことは少し残念だけど、でも、私はやはり所詮は不自然な存在だ。この辺りが潮時だと思う。あとは、最後の賭けがどう出るか、だけ。

とにかく、これで人間を、彼を守れた。ならば、私は満足できる。

私自身のため、そして私を望んでくれる人のために、私は出来ることを精一杯にやった。

そう。私は望まれる存在になれた、その実感があった。たとえロボットの体であろうとも、きっとその時、私は穏やかに微笑むことが出来ただろう。

何も怖いことはなかった。もう、既に大半の処理も記憶もクリ

アされていたけど、それでも私は満足していた。
そして、ふと思った。

ああ、そうだ…。

あのメッセージ、あれは私の思い出の中に生きている彼が発したんじゃないだろうか？　こんなところで、彼と協力することが出来たのかもしれない。そう考えると、感謝と満足感に満たされた。

そして誰にともなく囁いた。

その一瞬後、私自身はクリアされた。

本当に欲しいもの（後書き）

結局、バッドエンド？ いえいえ、彼女は十分に満足しています。
彼女は何を最後に囁いたのでしょうか？

それはエピソードで（え

改稿と同時に、エピソードを追加しました。

エピソード（前書き）

五枚会、としては正式には前回の第十話が最後ですが、ちょっと尻切れトンボ状態だったので、エピソードとして補足しました。

このエピソードだけは、彼の視点で、彼が感じてきたことを、少し補足した形にもなっています。

エピソード

全てが止まった様な静寂が世界を支配していた。

それは、僕とハルが予測した範囲のことではあった。

おそらくネットに繋がるコンピュータが全て停止したんだろう。

つまり、集合意識は僕たちにとっては脅威で、彼女が対決した結果が出た、ということだ。停止しただけで反撃が無いということは、ハルは成功したんだろう。

けど、ハルも動かない。それはハル自身も一緒に消えたってことだろうか？

僕は、そして世界はまだ生きている。つまりこれは、最悪じゃないのだろう。

けど、僕にとっては最悪と何が違うのか判らなかった。

動かなくなってしまったハルの肩を掴んで何度も揺さぶったが、やはり、それはもう抜け殻の样だった。ほんの数秒前まで、そこにハルが居たのに……。

ハードウェア的には、何も変わっていない。だが、もう全てが違う。

彼女たちの本気の戦いは、人間にとってはあっけないものだ。

全力で彼女をサポートするつもりだった。けど、始まった、思った次の瞬間には終わっていた。

そして、僕にとって決定的なものが失われてしまった。やっと取り戻したはずだった…。

彼女自身がどこまで信じていたのか判らないが、ハルは紛れもなく晴海だった。

あの晴海が持っていた癖。戸惑ったときに髪をいじる、ハルが

そんな懐かしい仕草をしたとき言葉を失った。誰かが晴海を模倣させているのか？ もし、そんな誰かが居たとしたら許さない。そんな憎悪にも似た感情に駆られたこともあった。

けど、どうも違うと感じた。

だから、何一つ見逃すまいと、彼女を見つめ続けた。

確かに、最初は半信半疑だった。

それでも、見れば見るほど、そして話せば話すほど、ハルは晴海以外ではあり得ないと感じる様になった。もしかしたら、僕自身がおかしくなったのか？ 本気でそんなことも考えた。

だが、彼女が口を滑らせ、二人だけのあだ名を口にした日、僕の中で全てが確信に変わった。

理屈は判らない。けど、あのロボットに宿っているのは晴海の魂だ、と。

あれは、本当に喜びの瞬間だった。

それなのに……。

信じられなかった。

彼女をまた失うことになるなんて、なぜ二度もそんな目に遭わないといけないのだろうか。

彷徨うように表に出た。

行く当てなんて無かった。だが、こんな状態で向かう場所はない。つしかなかった。

それは晴海が寝かされている部屋だ。

やはり、予想通りに、その部屋でも全てのコンピュータは動いている様には見えなかった。

それでも、言わずにはいられなかった。

「ハル……。居るんだろ？」

その問いかけが虚しいことは理解していた。　けど、それしか思いつかなかった。

ふと、部屋の隅に置かれた端末に文字が表示されていることに気が付いた。

そのメッセージを見た瞬間、涙が溢れた。

『ありがとう。　愛してる』

やっぱりここに居たんだ……。　僕の予想は正しかった。
そう、僕の考えは間違ってた。なかった。

だが、このコンピュータも全て止まっている。
つまり、希望は失われた、ということなのだろうか……。

ここで絶望しちゃいけない。　せつかくハルが残してくれた世界なのだから、精一杯生きなければ、彼女が命をかけて成し遂げたことを無駄にはいけない。　その理屈は判った。

けど、何も感じる事が出来ない様に思った。
死んではいけない。　けど、これが生きてる、ということだろうか？
どうしても、そのことを受け止めることが難しいと思った。

そのとき、この部屋の何かに違和感を感じた。

最初、それが何か判らなかった。

だが、僕は、とうとう違和感の正体を探し当てた。

晴海の脳をモニタしている脳波計に、脳波のパターンが現れていた。晴海の脳が再び動き出している、そんな証拠が目の前に示されていた。

信じられない思いで、ゆっくりと晴海を振り返った。

しばらくは、何の変化もなかった。

やがて、晴海の目がゆっくりと開くのを、それでも信じられない思いで見つめていた。

僕は、恐る恐る彼女の手をとった。その僕に向かって、彼女の視線が動き、僕たちの視線が絡み合った。そして、微かにではあったけど、それでもはつきりと僕を呼んだ。

「コージ……？ ……」

失ってなかった……。その喜びをどう表現すればよかったのだらう？

あれから数週間経った。

彼女と一緒に生きるようになり、徐々に判ってきた。全てを取り戻した訳じゃなかった。

あの戦いのさなか、彼女は、晴海の脳を損傷させたプログラムを修正し、そのプログラムを使って、電子データとなってしまう彼女自身を逆変換して晴海の脳に書き込む、ということをしてのけた。それでも、時間が足りなかった為か、戻ったのは一部だけだった。ハルとしての、そして晴海としての、その記憶の大半は失われていた。それでも、彼女は晴海であり、ハルだった。僕には、その心が、魂が、はつきりと彼女だと感じられた。僕には、だから、僕たちは手を取り合うことが出来た。

そして、僕たちは笑顔になった。

どうしてって、僕たちは生きていた。

そう。これから創っていくんだから。

エピソード（後書き）

五枚会、本当に長い間ありがとうございました。

それではまた！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7535o/>

人形の心

2011年6月24日13時40分発行